

ピンホールカメラの中の風景

松本侑壬子・ジャーナリスト

冒頭に人間の目玉が出てきてギョッとさせられる。ヒロインの写真家三奈子（浅丘ルリ子）が眼科医から深刻な診断を受け、失明する前にどうしても見ておきたい故郷を訪ねる、というこの物語の発端の場面である。眼で「見る」とはどういうことか — 脳裏に刻まれた故郷の風景を追うヒロインのカメラは現在を撮りながらいつの間にか60年以上前の風景と重なっていく…。

海外でピンホールカメラ写真家として活躍するシュナイダー植松三奈子（浅丘）が戻ってきたのは、子どものころに過ごした豊橋（愛知県）である。1943年、東京からこの町に引っ越してきた6歳の三奈子（笠菜月）は12歳の兄・真次（鈴木駿）が大好き。兄の転校先の小学校まで付いて行き、教室の一番後の席をもらって一緒に授業を受けたり、兄がよそ者扱いされながらいじめに負けず、次第に仲間の信頼を得ていく姿を大きな眼で見守ったり。悪ガキたちと一緒にこっそりスイカ畑に忍び込み、石で割ったスイカに体中でかぶりついたのも、忘れられない思い出の一場面だ。

真次が一番大切にしていたのはピンホールカメラだった。源流は15世紀にも遡ると言われ、小箱に開けた小さな穴にレンズをつけてフィルムを入れただけの素朴なカメラだ。このカメラで撮った祖父、母子3人の写真 — 出征中の父の居ない寂しいが懐かしい家族の肖像は三奈子の宝だ。中学校に入学した真次は学徒動員に借出され、1945年夏、広島原爆投下の翌日に豊川の海軍工廠で米軍の猛爆撃で亡くなった。まだ13歳の早過ぎる死だった。その後、三奈子がどんな道をたどって

現在に至ったかは何も語られない。しかし、三奈子の兄への思いは、海外でピンホールカメラ写真家として活躍するという形で今も生きている。

露出を長くしないと結像しないピンホールカメラは、動くものは記録しない。校庭で遊ぶ生徒たちを写しても、現像してみると校舎に囲まれた無人の校庭があるだけだ。瞬時を切り取るデジカメラやあっという間に仮想映像を創出するCGとは対極の存在。三奈子はこの“超スローライフ”なカメラで現代の世の中を見据え、記録しているのだ。

三奈子は故郷の風景を撮影中に偶然知り合った地元の高校生らを誘って海軍工廠跡を再訪するが、戦争で早咲きの花のように散った兄を思い出し、悲しみに思わずしゃがみこんでしまう。そして、平和の時代の生徒らに向かって語りかけずにはいられない。愛する者を失う悲しみ、命の尊さ、平和の必要なわけ…。「戦争は昔のことではない。この悲しみを味わっている子どもは今もいる。世界には戦争中の国が、たくさんあるのだから」と。

この場面は、戦時中、召集令状を受けた担任の若い教師（徳山秀典）が、真次らを前に万感の思いで別れを告げる場面と見事に呼応している。あの日、兄らと一緒に先生との別れに泣いた幼い三奈子が、今度は現代の高校生らに心を込めて自分の戦争体験を語りかけるのだ。撮影中、浅丘の話に感動したエキストラの女子高生が思わず泣き出してしまったという。反戦メッセージばかりでなく、ピンホールカメラの不思議な映像から、浅丘の着る芦田淳ファッション、地元の“ええじゃないか踊り”など楽しい見どころもいっぱいだ。



日本映画（105分）／菅原浩志監督

『早咲きの花』

上映情報は <http://www.hayazaki.com/theater.html> で紹介

